

カ、台湾、シンガポールなどの中国系住民向けに年間3000トンほどを輸出している。輸出量の5～7割をアメリカが占める。

J A帯広かわにしは「アメリカでは西海岸が主な販売先だったが、近年は東海岸でも需要が高まっており、新品种による収量増で対応したい」(青果部)と話している。

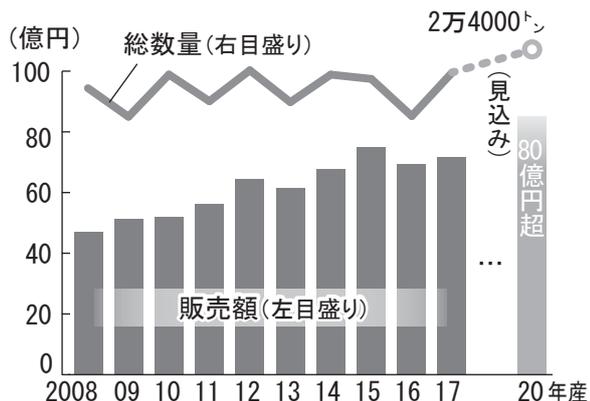
◆廃棄少なく安く 供給責任果たす

有塚利宣組合長の話

ゴボウのようなナガイモでは皮をむくと歩留まりが低く、従来のナガイモは40%が捨てられていた。「とかち太郎」では、この割合が縮まっていくだろう。試験栽培で20%収量が上がることが確認されている。捨てる部分が少ない上に安く提供でき、消費者には得になる。

毎週40フィートコンテナで18トンを出しているが、週に2コンテナ分36トンを出そう求められている。新品种になれば需要に応えることができ、供給責任を果たせる。輸出が増えれば価格も維持される。輸出倍増につなげたい。

◆「川西長いも」の販売額と総数量 (万トン)



◆突然変異きっかけ、より太く

エースへの期待込め 開発に20年

帯広市川西地区のナガイモ生産はもともと、カボチャやアスパラガスなど地域に合った野菜栽培を研究する中で候補に挙がった。地中に石が少ない川西地区の土壌はナガイモ栽培に適しており、重機による効率的な収穫方法が確立され、劇的に栽培が広まった。

種イモは当時の先進地だった夕張から購入。夕張の品種を基に選抜してきたが、1999年にJ A帯広かわにし、J Aおとふけ、十勝農協連、十勝農業試験場の4者で新品种の開発に着手した。より太くて果肉が白く、粘りしみずみずしさのあるナガイモを生産し、主産地の青森県と差別化を図るのが目的だった。

転機となったのが2011年。突然変異で太さのあるナガイモを発見し、これを基に開発を進めた。複数回の栽培試験を経て農水省に品種登録を申請、17年に認可された。

「とかち太郎」の名前は十勝農試を中心に一般公募で決めた。長男のイメージが強い「太郎」の名前が付いた新品种は、十勝農業の「新しいエースに」と期待されている。J A帯広かわにしの有塚利宣組合長は「太郎という名前はどっしりとした雰囲気を感じさせ、とっくり型の形状とも重なる。強い十勝を体現した名前になった」と話している。



新品种のとかち太郎 (右) と従来品種 (2014年)